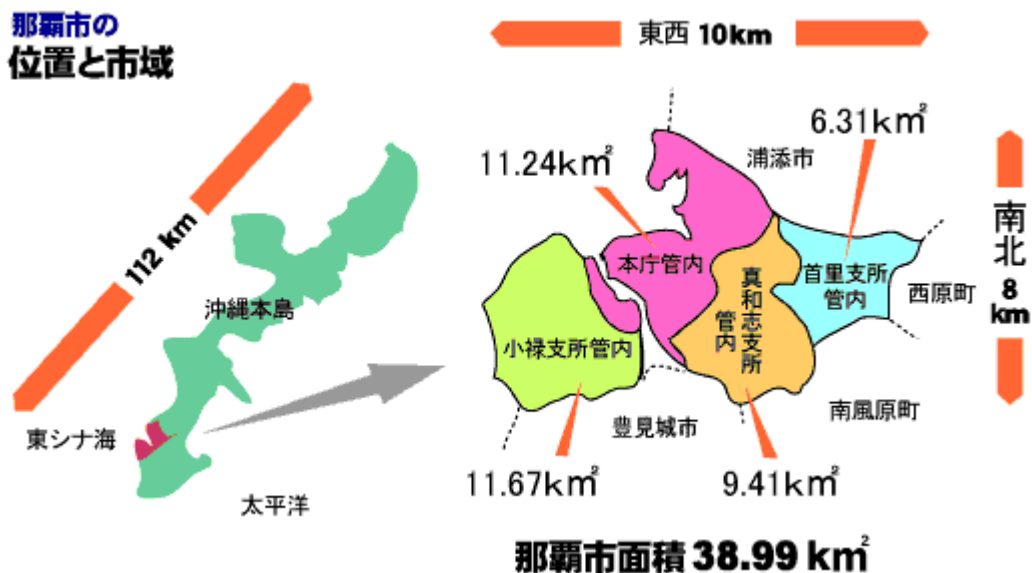


## 事例番号 149 景観再生とパートナーシップのまちづくり(沖縄県那覇市・壺屋地区)

### 1. 背景

壺屋地区は、琉球王府が各地に点在していた陶窯を約300年前にこの地に集めたことが地区の起源である。那覇市の中心市街地に接する地点にありながら、伝統的な窯業の窯(登窯(のぼりがま))、拝所(御獄)、石垣、家屋(赤瓦の屋根等)、ガジュマルの緑等により構成される歴史的、文化的な街並みを今日に至るまで保持してきた。しかしながら、那覇市の経済拡大、市街地拡大とともに同地区周辺にも住宅や商店が建て込むようになり、窯が並ぶ地区の町並み維持に支障が生じるようになってきた。また、地区の中心的街路である「やちむん通り」(全長 400 メートル、「やちむん」とは「焼物」の沖縄読み)には両側に陶器店、工芸品店、骨董店、喫茶・飲食店等が建ち並び、買い物や散策の場になっているが、その魅力の低下が地区経済力の低下に結び付くのではないかと危機意識も生じてきた。その背景には以下の事情があった。

- ・ 住宅地の拡大および過密化により、窯の煙害が問題になってきたこと  
(それによりマキからガスへの転換が進み、伝統製法にこだわる人々が読谷村など地区外へ流出した)
- ・ 生活様式の近代化により鉄筋コンクリートの建物が増え、伝統的な建築が減少してきたこと  
(台風対策、シロアリ対策という側面もある)
- ・ 建物の老朽化が進んできたこと
- ・ 伝統的な様式を維持するためには大きな費用がかかること



(資料: 那覇市ホームページ)

### 2. 目標

壺屋地区は、壺屋の歴史と文化とを保全・活用した「やちむんの里」づくりを目指している。具体的には、2005(平成 17)年度に実施された「壺屋地区身近なまちづくり事業」において市と壺屋地

区まちづくり協議会とで開催されたワークショップで、地区の将来像を「緑・水・伝統文化が薫る街なかのオアシス“壺屋焼の郷”」とし、次の目標を掲げた。

- ① 快適に散策できるまち
- ② 文化(財)を活かしたまち
- ③ 窯元が活気のあるまち



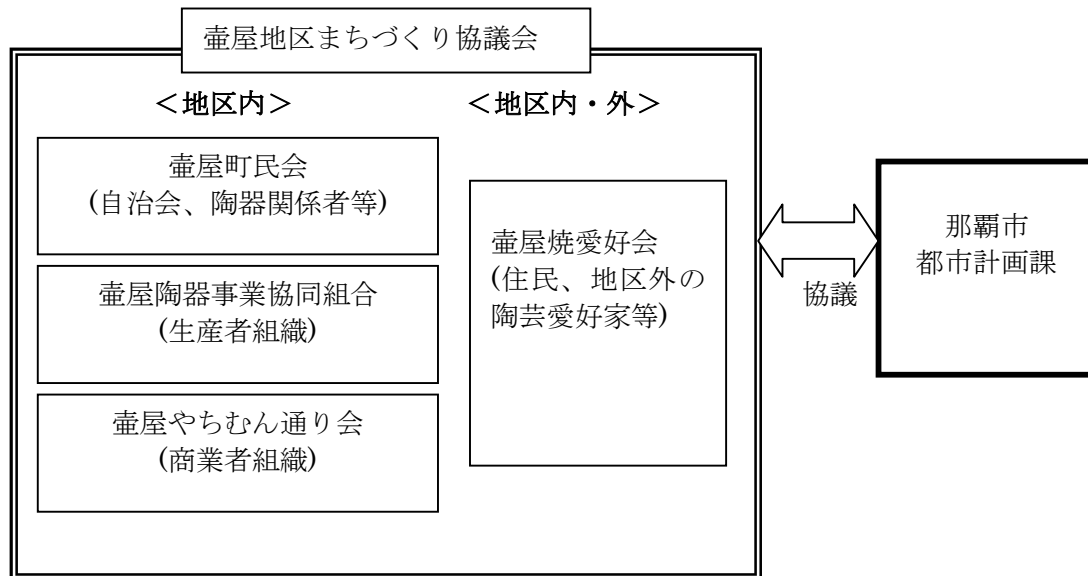
やちむん通りマップ (資料:那覇市)

### 3. 取り組みの体制

「壺屋地区まちづくり協議会」がまちづくりの中心組織である。それが発足した経緯はおおむね以下のとおりである。

壺屋地区には「壺屋町民会」(自治組織・陶業関係者主体)、「壺屋陶器事業協同組合」(生産者組織)、「壺屋やちむん通り会」(商業者組織)、「壺屋焼愛好会」(基本的に地区外の陶芸愛好家)の4つの組織があるが、これらの4組織が1996(平成8)年に「壺屋の通りを考える会」を発足させ、それがその後「壺屋のまちづくりを考える会」に発展した。その後、1999(平成11)年からは壺屋の特性を活かした景観形成ルールづくりに着手した。その際、住民のまちづくりに対する機運の高まりを受け、「壺屋のまちづくりを考える会」が発展的に解消され、“通り”の整備から“まちづくり”へと領域を広げつつ4つの組織が連携する形で「壺屋地区まちづくり協議会」が新たに発足し、地区のまちづくりの基本精神となる「壺屋地区まちづくり憲章」が制定された。

那覇市は壺屋地区まちづくり協議会の要請に基づき、壺屋地区を那覇の歴史・文化景観を代表する地区のひとつとして2002(平成14)年に「都市景観形成地区」に指定した。また、2003(平成15)年には「全国都市再生モデル調査」が実施された。これらにおいては、協議会を中心に地元住民による活発な議論が重ねられており、協議会は官民協働のまちづくりの住民側組織として機能している。







壺屋やちむん通り (資料:那覇市観光協会ホームページ)



壺屋地区住宅地のまちなみ (資料:都市再生本部)

## 4. 具体策

### (1) 中核施設の整備

#### ① コミュニティ道路の整備

「やちむん通り」をコミュニティ道路として整備した。この事業においては 1996(平成 8)年度に那覇市が石畳道整備事業を予算化し、同年に発足した「壺屋の通りを考える会」(のち「壺屋のまちづくりを考える会」へ、さらに「壺屋地区まちづくり協議会」へ改組)が中心になって事業を推進した。事業化に際しては、考える会と那覇市との間でまちづくりワークショップを繰り返して計画を詰めていった。そして、1998(平成 10)年、琉球石灰岩を用いて独特の美しさを出した石畳道が完成した。

この事業によって整備されたやちむん通りと町なみは各方面から高い評価を受け、協議会参加組織である「壺屋やちむん通り会」は、1999(平成 11)年度に「地域づくり全国交流会議」で国土庁長官賞を、2000(平成 12)年度に「那覇市都市景観賞」を受賞した。また、「壺屋地区まちづくり協議会」は中心商店街と一緒に毎年「ピース・ラブ・マチグァー(まちを愛すること)&壺屋まつり」を行っているが、この活動も評価されて 2001(平成 13)年に同会が「ふるさとづくり振興奨励賞」を受賞した。さらに、壺屋やちむん通りは 2003 年に「土木学会デザイン賞」の優秀賞(琉球大学・安藤教授)を受賞したが、その講評の中には次の言葉がある。

これ見よがしの華やかさを排し、「あたかも昔からそこにあったかのように」という思想で、生活街路としてのリアリティと来街者が求める沖縄らしさの双方をまとめあげた手腕は見事である。ことに琉球石灰岩が車道に用いられているため、年月を経て美しく古びていき、思想が徹底されることがよく分かる。「壺屋の通りを考える会」が組織され、コアメンバーは延べ 30 回以上のワーキングを行ったと聞く。その努力に敬意を表したい。

#### ② 壺屋焼物博物館の建設

柳宗悦は「日本の伝統的な窯場としては第一に推すべきもの」と壺屋を賞賛したが、その壺屋の歴史の記憶を「焼物博物館」として土地に焼き付けることで地域が活性化するとの考えから、1989(平成元)年度に那覇市教育委員会が博物館建設を提案し、1998(平成 10)年に開館した。

### (2) 交通対策等(2003 年度都市再生モデル調査)

2003(平成 15)年度に全国都市再生モデル調査「壺屋の歴史と文化を保全活用した『やちむんの里』づくり調査」が実施された。この調査では、地区の歴史的・文化的環境を活かしたまちづくりを推進するために、

- i) 地区内交通や都市計画道路のあり方
- ii) 登窯を復活させ活用するための手法
- iii) 伝統的技法による壺屋焼生産の場の再生戦略

等の総合的な検討を、市主導の住民参加ワークショップ等で行った。その結果を踏まえて、今後、一方通行の方向の検討等をすすめることが課題になっている。

### (3) 「都市景観形成地域」の指定

壺屋1丁目を中心とした約8haの地域が2002(平成14)年4月に「壺屋地区都市景観形成地域」に指定された。これは那覇市都市景観条例に基づくもので、地区内において建築物等の新築、増築、修繕を行う場合、届出によりデザインの調整を行うものである。景観形成の方針及び基準は以下のとおりである。

#### <景観形成の方針>

- 壺屋のシンボルをネットワークした、歩いて楽しい通りを形成する。
- スージ(路地)沿いの景観要素を保全・回復する。
- 壺屋らしいスージのゲート空間を演出する。
- 壺屋らしさを感じさせる住環境を創出・保全する。

#### <景観形成基準>

- 建築物の壁の位置・屋根の意匠形態
- 建築設備・工作物・広告物等の設置方法・意匠形態
- 敷地内緑化・駐車場・空地の設置方法
- 造成等



景観形成の基準 (資料:那覇市)



景観形成に著しく寄与すると認められる瓦(琉球瓦)・石積み(琉球石灰岩)工事に対しては、工事費の一部が助成される(対象工事費の 1/2 以下かつ 100 万円以下)。自然建替えが中心であるため街並みへの効果が発揮されるまでには時間がかかるが、赤瓦屋根等の助成の効果が少しずつ出始めている(2002～2004 年までの 3 年間で 7 件の申請)。

### 壺屋地区におけるこれまでの主な活動

	＜那覇市の取り組み＞	＜壺屋の取り組み＞
1985年	●那覇都市景観条例(4月)	●'79～壺屋陶器まつり開催
1986年	●那覇市都市景観基本計画(9月)	
1988年	●壺屋地区景観形成計画策定のための調査(3月)	●ピース・ラブ・マチグー&壺屋祭り開催
1990年	○陶業の中心地としての『やちむんの郷』づくりを第一の目標とし、地区の活性化のあり方に等について検討し、①壺屋総合センター、②ヤテムン通りコミュニティ道路化、③スー・ジグワネットワーク等の整備モデルを提案。	
1991年	●「壺屋焼物博物館基本構想」策定	○3回のワークショップを経て、住民案をまとめ市長へ提出。 ○“道づくり”の取り組みが、住民主体のまちづくりとして評価され『国土庁長官賞』等を受賞。
1995年	○中心地区商業地でのやちむん通りの位置づけをし、壺屋の歴史・文化を生かした活性化の方向性を示し店舗のあり方の問題等も提起している。やちむん通りのコミュニティ道路化再度提案。	
1996年	●壺屋やちむん通り活性化ビジョン策定事業(3月)	●『壺屋の通りを考える会』発足(9月) ※『やちむん通り会』等4団体で組織する。
1998年	●壺屋焼物博物館開館(2月) ●石畳の道完成(12月)	●看板づくり ●店舗修景
2000年	●壺屋地区景観形成地域指定調査(やちむん通り)	●景観形成地域指定への向けて組織立ち上げ ※『考える会』同様4団体と地権者で組織する。
2001年	●壺屋地区景観形成地域指定調査(背後地)	
2002年	●景観形成地域指定(4月)	●シーサーの日開催(4/3) ○通り会は割引セール、博物館はイベントや特別展等をする。

(出典:糸満りえ・池田孝之「歴史的資源を活かしたまちづくりによる地域活性化の実態～那覇市壺屋のまちづくりを事例に～」日本建築学会学術講演梗概集(2003 年度))

## 5. 特徴的手法

古くから市街地の一角を占める居住の場であり、やちむんの製造拠点でもあった壺屋地区であるが、現在ではこれらに加え“観光スポット”としての新たな魅力も加わっている。地域の居住環境を保ちながら、産業・観光等の機能をミックスさせた景観形成を市民と行政による協働型のまちづくりの手法により推進してきたことが当該地区の特徴である。この点は、那覇市の第 3 次総合計画や都市計画マスタープランでも強調されている。

### 第 3 次総合計画(1998(平成 10)年 4 月策定、目標年次 2007(平成 19)年)

7つの都市像を提示(市民がつくる自治都市、平和の発信都市、住みよい生活都市、美ら島の環境共生都市、学び創造する文化都市、アジア・太平洋の自由交易都市、世界の人々がゆきかう交流都市)。「市民がつくる自治都市」では「都市の主権者は市民」との認識

の下、「市民との協働が、那覇市のまちづくりの基礎」であるとし、「情報公開」をすすめ、「協働型まちづくり」の仕組みをつくり、「自治組織や民間非営利組織(NPO)、事業者と行政との対等な関係」を築いてまちづくりを進めていくとしている。

## 都市計画マスタープラン

「まちづくりの進め方」として「市民と行政による協働型のまちづくり」を掲げている。

- ・ 事業者を含めた市民と行政の協働が重要であり、協働型のまちづくりを基本とする。
- ・ 地域住民の参加を進め、地域の視点を重視した柔軟な計画実施を図る。
- ・ 従来、まちづくりは、とすればハード部門(道路や公園の整備など)とソフト部門(福祉や文化、コミュニティ形成など)とが分離して進められていくことが多く見られたが、協働型のまちづくりにおいては、市民の視点で総合化を図る。
- ・ 本来まちづくりは、これまでのように行政及び専門家しかできないというものではなく、そこに住んでいる住民自らが、積極的に計画段階からまちづくりに参画し、事業を進めていくことが重要である。
- ・ 市民参画を実現するためには、地域を理解し、愛着を持つコミュニティの存在が重要である。
- ・ 市民との協働のまちづくりを進め、市民が主体的に地域のまちづくりへ参画するためには、行政の保有する情報を公開し、市民と行政、市民相互がまちづくりに関わる情報を共有することが必要である。

## 6. 課題

壺屋焼や優れた町なみは首里地区と併せて観光客の評判がよく、那覇の観光スポットとして定着しているが、交通アクセスが悪いために「壺屋に行きたいがどこにあるかわからない」という苦情が多く寄せられている。アクセスルートの改善やわかりやすい情報の提供などが課題としてあげられる。また、現時点では未活用となっている文化財資源(スーヅグワー、井戸、窯、ムラガー等)の保存と活用も課題となっている。

(参考・引用文献)

那覇市ホームページ

糸満りえ・池田孝之「歴史的資源を活かしたまちづくりによる地域活性化の実態

～那覇市壺屋のまちづくりを事例に～」日本建築学会学術講演梗概集(2003年度)

中出文平+地方都市研究会『中心市街地再生と持続可能なまちづくり』学芸出版社、2003年

国土交通省都市地域整備局都市総合事業推進室『「元気なまちづくり」のすすめ』ぎょうせい、2004年